

62

公家・山科言経の勅勘時代は医師であった

—『言経卿記』から読みとく—

葉山美知子

京都医学史学会

山科言経（1543～1611）は16世紀後半から17世紀初頭に生きた公家である。足利義昭、織田信長、豊臣秀吉・秀次、徳川家康・秀忠を間近に見て、禁裏の正親町・後陽成天皇に仕えた。日本の歴史上、大激動の16世紀であったが、羽林家の家格をもつ中流公家の山科家は営営と朝廷に出仕し、有職故実、衣紋道、内蔵頭及び御厨子所別当の家職に励む日々であった。ところが山科家の根底をゆるがす事件が出来た。言経は妻の実弟、冷泉為満・四条隆昌と共に正親町天皇の勅勘を蒙ったのである。その経緯は定かではないが、京都葛野郡葛野村西梅津の所領争いであろう。山科家の所領は、家名の謂われである山科・西野一带と太秦付近の葛野西梅津を知行地とし、足利幕府崩壊後は信長に安緒される。しかし、信長が本能寺の変に斃れるや西梅津は朝廷に押領され、それを秀吉も認定したため、言経たちの梅津返還要求は却下され、天正13年（1585）6月19日に勅勘を蒙るに至った。24日には一条烏丸の自邸を引き払い、妻の弟たち一族共々京を出奔した。一瞬にして官位・住居・領地を失った言経たちが頼った先は、まず妻の実家の冷泉家であり、落ちつく所は妻の姉の嫁ぎ先で本願寺に繋がる脇門跡興正寺の頭尊佐超であった。勅勘は慶長3年（1598）11月3日まで、言経43歳から56歳に至る13年に及んだ。その間、本願寺一族と一蓮托生の日々であり、畿内の堺貝塚・大坂中島天満を経て秀吉から寄進された京都新寺内七条を転々としたのである。

『言経卿記』は天正4年（1576）正月元旦から慶長13年（1608）8月2日まで33年間に渡って書かれた日記である。本文では言経が勅勘を蒙った時代、それも社会が激動した文禄年間（1592～1596）に絞って言経の生活を考察した。都を逐われた言経一族は義姉の婚家先に身を寄せる。義姉は後陽成天皇の父・誠仁親王の子を産み、後に本願寺11世宗主頭如の次男佐超に再嫁した女人であり、転がりこんだ弟妹一族を衣食住物心両面の庇護をし続けた。言経はその恩義に報いるために山科家の家職のうち最も実生活に益がある本願寺家一族の健康管理に目を向けた。義姉は日記では「西御方」と呼称され、言経の初診は天正14年（1586）6月1日「西御方ヨリ頭痛・悪寒・歯痛等の由有之間、敗毒散令加味二包遣了」である。この時点で言経は、父・言継から受けついで余技の医薬分野を本業にして糊口を凌ぐことになる。勅勘当初の医療実績はともあれ、次第に医師としての認知度は高まり、本願寺界限に限定どころか地域に浸透、町人・商人諸々の庶民たちに信頼される町医者になっていく。言経は西御方邸の敷地内に寄寓の身であり、診察や用向きの出立に関係なく毎朝毎晩、西御方に立ち寄り健康度確かめ、必要な診療や投薬を怠らない。文禄年間では1年に平均275回、1ヶ月平均23日に西御方の施療・施薬の記述がある。任意で抽出した12ヶ月の西御方への施薬は、頭痛・発熱・めまいに効能がある川芎茶調散と茶調散が計421服、睡眠障害を除く安神散120包、腹痛・下痢に効く四物湯加味60包、人参丁香散49包、香薷散は父言継も好み、胃腸病に効き常備薬の感があるが331服にのぼる。多分、御礼や贈答用であろう。莢薬102包や快気散76包など効能不明薬がある一方、歯薬、瘡之落薬は命名どおりの薬か。また婦人病や血の道には四物薬、人参丁香散、愛州薬などを投薬している。

さて、以上のように西御方に対する徹底的健康管理は措くとして、勅勘時代の言経は本願寺の移転に従って居住地を転々とするが、いずれも地域医療に携わる市井の町医者として、公家では体験できない人生の機微に触れた13年間であったに違いない。